

中世哲学会の今昔

松本正夫

中世哲学会創立の相談があったのは1951年秋、日本哲学会が京都大学で開かれた時のこと、今から丁度30年前で、その翌年1952年5月5日東京大学山上御殿で発会し、石原謙先生を会長に推した。この会はもともと反近代主義とは云わずとも、近世啓蒙以後を重視し、それに先立つ中世思想を殊更、無視する近代主義的傾向に対する批判的反省をもつ、種々の思想傾向の人人によって発起されたので、単に中世思想研究の専門家だけでなく、広く哲学思想一般の研究者にも賛同していただけたのは倖わせであった。

石原謙先生は恰も同時期に発足した基督教学会とこの中世哲学会の両方の会長を1976年逝去されるまで兼任されたのである。今でこそ会員分布は平均化したと思えるが、創立当時に限って云えば、基督教学会ではプロテスタント系、中世哲学会はカトリック系が主導的であったのも止むを得ないことであるが、プロテスタントである石原謙先生が虚心坦懐、誠心誠意、両方の学会を主宰されたことは、後のバティカン公会議後カトリックも加わった^エ教会^ク合同^メ運動^ニを^ス予言的に先きどりしたもののようにも思われる。それにしても先生が戦前から中世思想研究について我々を啓蒙された岩下壮一師と東京大学でフォン・ケーベル先生に学ばれた相弟子であったことは単なる偶然とも思

えないのである。因みにケーベル先生には明治42年（1909年）『神学及び中古哲学研究の必要』と云う小著があり、ここに中古哲学と云うのは後に謂う中世哲学そのものに他ならないのである。明治大正に掛けて近代啓蒙思想摂取に大わらわのさなか、フォン・ケーベル先生の警世の言は高弟岩下、石原両先生に引継がれ、先きに岩下師を失った我らが漸くこの期に及んで石原先生を頭にいただきえた訳で、私共はこのことを心から倅わせに感じた次第である。

戦後五・六年といえ、私達が焦土から立上って、これからは文化によってしか世界に立向えないと心に決め、心中肢股を踏んでいた時代、一人で三人分の仕事ぐらひはしなくてはと気負っていた時代、——実際はそうも行かず、お恥しい次第になったが、——とにかく意気込みだけは盛んであった。それは中世思想研究についての啓蒙期であったとも云えよう。

しかし戦前からヨーロッパの学界で経験し、戦中戦後現場で研究に従事した人々の眼にはこれは些かドン・キホーテもどきに見えたかも知れないのである。私も1950年占領軍の命令で訪米し、その際、カナダのトロントにある中世哲学研究所を訪れ、恰度エチエンヌ・ジルソンがヨーロッパ旅行で留守中の彼の部屋に泊めて貰い、当時所長だったペギス博士に地下室にあるアルベルトゥス・マグヌス全集の未刊の原稿の復写フィルムを見せて貰ったことがあったが、その時これの校訂刊行の完了は21世紀になる予定と聞かされ驚嘆した。原典手稿はドイツで空襲のため一切焼失したという。中世哲学研究の必要へ思想的に啓蒙されていた私にとってもこの事実は気の遠くなるような

話であった。

とにかくヨーロッパの現場で仕事をされてきた方々や、実際にこういう研究者に接触された方々と、私など戦前戦後を通じて思想的に中世哲学研究——それも主としてトミスム研究の必要に目覚めただけの人間とでは些か考え方に異ったものがあるのは確かで、当時の自分を顧みて辱しく思うのである。

日本では中世哲学研究の必要に目覚めた多くの人々がアウグスティヌスの影響下にあり、そこからトマス・アキナスの研究に進む例が多いように思われるが、これは日本の知識人の多くがキリスト教の経験をプロテスタントから始めることと無関係でないように思われる。『告白録』に捉えられた私達がアウグスティヌスの中に「ローマは語れり、論争は終りぬ」というローマ首位権是認の意向に触れ、中世カトリック思想に対するアレルギーが薄れ、トマス・アキナス体系に挑む勇気も養われるという経路、或いはトマス・アキナスは神学に於いてアウグスティヌスに従い乍らも、しかし哲学に於いてはアウグスティヌスのプロティノスのプラトニスムに敢えて同ぜず、専らイスラム世界で重んぜられていた為、当時大いに危険思想視されたアリストテレス思想に与みし、そしてこの為には、『異教徒に向けての神学大全』の編纂までしたトマス・アキナスは武器を以て異教徒と闘うよりは、人間として「自然的理性の同じ光り」に照らされて、討論によって一致に到ろうとの無垢のヒューマニスムが彼にはあったのである。

私がトロントの中世研究所で、その留守中の部屋に逗留した、かのエチエンヌ・ジルソンは、この同じ精神から北大西洋

条約に反対してヨーロッパからカナダに移ったとも噂されていただけに、この逗留はいっそう印象深いものになった。机の中には美しい字体で書かれた彼のメモの断片があり、私は思わずそれを吾が手に納めたい衝動に駆られたが、抑えることができた。

以上とりとめのないことを書いてきたが、終りに臨んで、発会時、そして東京、京都、再び東京と移転した学会事務局の方方に心から感謝したい。今後の会の発展を祈る時、特にこの気持で一杯である。

(1981年8月3日)